

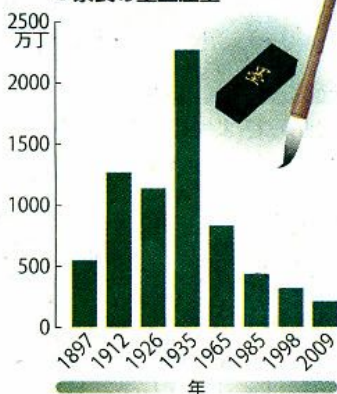


奈良県

律令国家の出発点となった奈良県の藤原京(橿原市)、平城京(奈良市)の遺跡からは、役人が業務内容を墨書したり、字の練習に使ったりした木簡が大量に出土し、1300年以上前から墨が大量に使われてきたことがわかる。生産も盛んで、奈良市内の11業者でつくる奈良製墨協同組合によると、2009年に

墨の生産量が全国一

奈良の墨生産量



伝統の技法で墨を作る職人(奈良市六条の墨運堂で)



「書」を支え続け1300年

県内で生産された書道用の墨は210万丁(1丁は15g)と、全国生産量の98%を占める(残る2%は三重県)。「日本書紀」によると、墨は飛鳥時代の610年、朝鮮半島から高句麗の僧・曇徴が日本にもたらしたとされる。

8世紀初頭に定められた大宝律令には、墨製造を担う「造墨手」という職もあった。東大寺の大仏を建立した聖武天皇のゆかりの品などを収めた正倉院にも、古墨十数点が現存し、墨とのつながりは深い。製墨作業が行われるのは10

4月。菜種油を燃やして集めたススと、牛の皮を煮詰めて取ったニカワを練り合わせ、型に入れた後、3か月ほど乾燥させる。奈良市六条の「墨運堂」取締役、松井信之さんは「奈良盆地の厳しい冷え込みが水分を絞り切るので、良

質の墨ができる」と話す。生産のピークは1935年。44業者で2265万丁を製造したが、戦後は鉛筆とノートが普及し、需要は減り続けた。近年、伝統文化や作法が学べ、情操教育にも効果があると、書道が再評価され、2006年には静岡県伊東市が「書道教育特区」として小学1年から毛筆の授業を実施。08年、那覇市も特区の認定を

受けた。同年に愛媛県四国中央市で、高校生による「書道パフォーマンス甲子園」が始まると、はかま姿で大きな筆を操る入書道ガールズVが脚光を浴びた。映画化もされて、書道人気は広がりがつつある。業者側も伝統を守りながら、最新技術を導入。粒子の細かいススを均等に練り込む機械を使ってニカワの量を減らし、すりやすい墨を発売するなど、付加価値の高い商品開発を進める。工場見学や手で握って作る「握り墨」体験も行い、書道人口の掘り起こしにも努める。同組合は「携帯電話やメールが通信手段の主流になった今こそ、手書き文字の温かさを伝えたい」と

している。